

第八回 平成二十五（二〇一三）年十二月二十一日

「芸能：神々まじりから楽しむまじりく」

Performing Arts: from Spiritual Communion to Enjoyment

村瀬 智 (むらせ・ちかみ)

二〇一三年度から向こう三年間の大手前大学公開講座の共通テーマは、「集うく衣・食・住・遊く」です。今日はその第一場第四章の「遊」で、「芸能・神さまごとから楽しむごとへ」という内容でお話ししようと思います。

さて、わたしが三十年にわたって追いかけている研究テーマは、インド文明の文化人類学的研究です。とくに、ベンガル地方の「パウル」とよばれる宗教的芸能集団に焦点をあてて研究をすすめています。今日のわたしの話も、ベンガルのパウルを紹介するようなことになるかと思っています。

一、ベンガルのバウル（概略）

① 風狂の歌びと

バウルがベンガル社会に与えているイメージは、わざと社会の規範からはずれようとする狂人のイメージです。バウルはカーストやカースト制度をいっさいみとめません。またバウルは偶像崇拜や寺院礼拝をいっさいおこないません。彼らの自由奔放で神秘主義的な思想は、世間の常識や社会通念からはずれることがあり、人びとからは常軌を逸した集団とみなされることがおおいのです。実際に、ベンガル語の「バウル」という語は、もともと「狂気」という意味です。そしてその語源は、サンスクリット語の「ヴァー・トゥラ *vātula*」（風邪の熱気あてられた、気が狂った）、あるいは「ヴァークラ *vyākula*」（無我夢中で、支離滅裂な）に由来するようです。

バウルの歴史がどこまでさかのぼれるかは不明です。しかし、中世のベンガル語の文献では、バウルという語は、牛飼いの女のゴピーがクリシュナに恋をしたように、「（神に恋をして）狂気になった人」という意味でつかわれはじめています。たとえば、十六世紀のベンガルの熱狂的な宗教運動の指導者チョイトンノ（チャイタニヤ *Chaitanya* 1485-1533）の伝記には、「我、クリシュナのはてしなき甘露の海にさまよひ、狂気（バウル）となれり」といったような文脈でしばしばでてきます。しかしバウルという語が、そのこ

ろに狂人のような宗教的態度の「個人」をさしていたのか、あるいは「宗派」としての意味をもちはじめていたのかは不明です。

現代のベンガルでは、バウルという語にはまだ「狂気」というふかい意味がひそんでいますが、その語はもっぱら「バウルの歌と音楽を伝承する一群の人びと」、あるいは「バウルの歌と宗教を伝承する一群の人びと」をさす、といって差し支えないでしょう。このような、バウルという語の語源や中世の文献での使われ方、そして現代社会での意味合いやイメージを考慮して、ベンガルのバウルのことを、「風狂の歌びと」とでも名づけておきましょう。

② マドウコリの生活

さて、そのバウルとよばれる「一群の人びと」が、いったい何人いるのかあきらかではありません。インド政府が一〇年に一度おこなう国勢調査の質問項目にもないほど、バウルは少数です。それにもかかわらず、バウルはベンガル社会で、はつきりと目立つ存在なのです。

バウルがベンガル社会で目立つのは、彼らのライフスタイルが、一般のベンガル人のそれとは根本的に異なっているからです。そのちがいは、「生活費の稼ぎ方」です。

バウルは、世俗的な意味で非生産的です。彼らは農業労働や工業生産、手工芸作業、商業活動などに、

いっさい従事していません。パウルは、一般のベンガル人に経済的に依存し「マドウコリ」をして生活費を稼いでいるのです。ベンガル語の辞書は、「マドウコリ」という語を、「蜂が花から花へと蜜を集めるように、一軒一軒物乞いをして歩くこと」と説明しています。すなわち、ベンガルのパウルとは、「みずからパウルと名乗り、パウルの衣装を身にまとい、人家の門口でパウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えたりして、米やお金をもらって歩く人たち」のことです。パウルは、世捨て人のようなゲルア色（黄土色）の衣装を着て、「門づけ」や「たく鉢」をして生活費を稼いでいるのです。

③ パウルの宗教

パウルの宗教は、ベンガルのヴィシユヌ派の思想やタントリズムの系統に属するサハジャール派の思想、ヨーガの修行法、イスラム神秘主義など、いくつもの宗教的伝統の影響を受けています。しかしパウルの宗教の核心的な部分は、「サドナ」（成就法）とよばれる宗教儀礼の実践にあります。そして、このサドナのすべては、「人間の肉体は真理の容器」という信仰にもとづいています。

この信仰をもうすこし整理すると、ふたつの原理に分解できるかと思えます。（１）人間の肉体は、宇宙にあるひとつの「もの」であるだけでなく、宇宙の「縮図」である。（２）人間の肉体は、神の「すみか（住処）」であるばかりでなく、神を実感するための唯一の「媒介物」である。つまりパウルは、人間

の肉体を小宇宙とみなし、みずからの肉体に宿る神と合一するために、みずからの肉体を駆使してサドナを実践するのです。このサドナには、ヨーガの呼吸法や坐法を通じておこなわれる性的儀礼や、宇宙を構成する五粗大元素、すなわち「地」「水」「火」「風」「空」を、人間の器官や分泌物にたとえておこなわれる儀礼などをともないます。そして、サドナに関することがらは、もっぱらグルから弟子へ、こっそりと伝えられるのです。

④ バウルの歌

バウルの宗教はバウルの歌に表現されています。しかしバウルの宗教には秘密のことがらがおおいので、その秘密をうたいこんだバウルの歌には、しばしば「なぞめいた用語」（サンダー・バーシャー）が使用されています。つまりバウルの歌には、表面上の意味の奥ふかく隠された「真の意味」を表現するために、暗号のような語句や表現が意図的に使用されているのです。このためバウルの歌は部外者にとっては難解で、いくつもの解釈が可能であったり、あるいは意味不明のことがおおい。その反面、部内者には「なぞ解き」をするようなおもしろさがあるといわれます。

ときどき夕方などに、グルのアーシユラム（道場）に弟子たちがあつまってくる場合があります。そこでもサドナについて議論されることがあるのですが、それは主としてバウルの歌の解釈を通じてです。彼

らはパウルの歌をうたい、パウルの歌の「なぞ解き」を楽しんでいるのです。しかし、歌の「真の意味」は秘密とされ、議論はグルと弟子たちのあいだにかぎられます。そして彼らは、秘密のことがらに関して、部外者には軽率に発言しないようにと戒められています。

⑤ バウルの道

マドゥコリの生活は、ひとりの人間が「パウルになる」ためにも、また「パウルである」ためにも不可欠の要件です。これは彼らを選んだライフスタイルです。そしてこのライフスタイルそのものが、彼らが主張する「パウルの道（パウル・ポト）」の基本なのです。パウルの道とは、「マドゥコリの生活にはじまり、神との合一という究極の目標にいたる道」です。それは「人間の肉体は、真理の容器」という彼らの信仰にもとづいています。パウルの説明は実に明快です。「わたしたちは富をもたない乞食です。わたしたちの唯一の財産は、この肉体です。しかし、この肉体には神が住んでおられる。それ以上にながら必要ですか」と語なのです。おおくのパウルが説明してくれた「パウルの道」を要約すると、つぎのようになるかと思えます。

人は、もしパウルの道にしたがうならば、だれでもパウルになれる。ただし、パウルの道の第一歩では、（カーストの義務を放棄し）マドゥコリの生活を採用しなければならない。パウルの道の究極の目標

は、人間の肉体に存在する神と合一し、神を実感することである。パウルと名乗り、パウルの歌をうたい、マドウコリの生活をするだけでは、パウルの道の半分しかすんではない。パウルの道の究極目標に到達するには、宗教的トレーニングが必要である。パウルの歌を通じてパウルの宗教をまなび、ヨーガを通じて自己の心身を鍛えなければならない。そして最終的に、パウルのサドナを実践しなければならぬ。そのためにはグルの導きが必要である。

二、一九八三年の予備調査

さて、わたしはじめてベンガルの地に足をふみいれたのは、一九八三年五月でした。それ以前にも北インドや南インドをずいぶん旅行していましたので、コルカタ（カルカッタ）という大都会には、飛行機の乗り継ぎを利用して何度か訪れていました。しかし、ベンガルの農村に足をふみいれたのは、このときがはじめてでした。わたしはイリノイ大学の大学院生でしたが、やや土地勘のあるコルカタを拠点に、西ベンガル州のほぼ全域を歩いたのです。

当時、わたしのベンガル語会話能力はまだ不十分だったので、ベンガル語による質問を二十項目ほど準備しました。それらの質問は、パウルとわたしが互いに誤解しないように、単純な構文のものにしま

した。たとえば、「あなたのお父さんはバウルですか?」、「あなたの兄弟はバウルですか?」、「あなたのお父さんの兄弟はバウルですか?」、「あなたのお母さんの兄弟はバウルですか?」などです。

このようなベンガル語の親族名称を使用し、ほとんど「はい/いいえ」でこたえられるような簡単な質問でしたが、インタビュ어의テープをおこし、資料を整理しているうちに、その後の研究の方向を決定するような重大な結果が得られたことに気づきました。

予備調査の結果は、つぎの二点の要約できます。(1) すべてのバウルがバウルの家庭に生まれたわけではない。(2) バウルの家庭に生まれたすべての人がバウルになるわけではない。つまり、ベンガル社会の「一群の人びと」が、門づけ・たく鉢の生活を採用し、「バウルになった」のです。これは彼らを選んでライフスタイルです。

予備調査の結果は、インドのカースト社会を勉強してきたわたしにとって、新鮮なおどろきでした。そして、バウルの文化人類学的研究を、彼らのライフヒストリーから接近するという方向に導いたので。

バウルの文化人類学的研究を、ライフヒストリーからアプローチするという方法は、もつとも有効な研究方法だと思われます。なぜなら、バウルのライフヒストリーは、人びとの行動を規制するカースト制度がいまだに根強いベンガル社会の、「だれが」「なぜ」「いつ」「どのように」門づけ・たく鉢の生活を採用し、「バウルになったか」を、語っているはずだからです。また、ライフヒストリーの個々のケースは、

バウルになった動機や要因の幅ひろさだけでなく、彼らがバウルになってからの適応戦略の多様性も反映しているはず。さらに、バウルのライフヒストリーは、彼らが自分の人生をどのように意味づけているかをも語っているはず。

三、バウルのライフヒストリー

バウルに、なぜ彼らがバウルになったのかという質問をすると、十中八、九、「子どものころから歌や音楽がすきだったからだ」という答がかえってきます。しかし、個々のバウルのライフヒストリーを詳細に検討してみると、長期にわたる心理的・経済的不安を経験したのちに、バウルになったようです。ほとんどのライフヒストリーは、彼らがマドウコリの生活をはじめたり、グルをもとめたりする前に、それらの行動のきっかけとなった危機的状況があったことを、それとなくしめています。

ベンガル社会の一群の人びとが、なぜバウルの道をえらんだのかを、ただひとつの要因をあげて説明することはできません。彼らがバウルになった動機には、いくつもの要因が複雑にからみあっているのがふつうです。それらは、慢性的な貧困、父母の別居による家庭崩壊、本人の意思のはいりこむ余地のない結婚に対する不安、世代間の反目、そして土地所有権や相続権をめぐる争いなど、解決できない抑圧の具体

的な経験です。

バウルになった動機のもうひとつの主要な要因は、乳・幼児期における親の死の経験です。六六名のインフォーマントのライフヒストリーの資料によると、十歳未満で父親と死別したバウルは十八名（二十七・三％）、おなじく母親と死別したバウルは十四名（二十一・二％）です。このうち、両親ともに死別したバウルは八名（十二・一％）です。これらの比率は、一般のベンガル人のそれよりも、はるかにたかいたと思われる。

母親の死後、母親を失った乳・幼児は、父方か母方の血縁親族に育てられ、父親は再婚してあたらしい家庭をもつことがおおいようです。いずれにせよ、このような境遇にそだったバウルは、父親の死にともなって、異母兄弟間の相続権争いにまきこまれた事例が数例ありました。また、乳・幼児期に父親を失ったバウルは、若くして夫を死なせた不吉な存在としての母親とともに、ただちに経済的にも心理的にも不安定な状況においこまれてしまっていました。さらに、幼児期に両親と死別し孤児となったバウルは、「物乞い」をするしか生きてゆく方法がなかった。しかし、近隣の人びとの処置で、その社会の世捨て人の養子や養女として保護され、育てられた幸運なバウルも数人いました。これは、世捨て人の存在そのものが、その社会全体の維持に寄与していることを暗示しています。

バウルになる動機となったその他の要因には、ひくいカースト身分による抑圧、単調な村の生活からの

脱出願望、神と接触したいという宗教的欲求、世捨て人に対するあこがれなどを指摘できます。しかし、大多数のバウルに共通していることは、程度の差はあれ、彼らが貧困生活から脱却できないで苦しんでいたことです。彼らは、まともな仕事につけないそれなりの理由をかかえていた。生きていく手段は、マドゥコリしかなかった。「マドゥコリの生活は、飢えよりまし」だったのです。

このように、バウルになる動機となった要因のおおくは、カースト社会に内在している特質や矛盾に起因するようです。そしてそれらの要因が彼らを脱出できない貧困においこみ、結果として生じた感情的な緊張や心理的な圧力は、バウルには、「現実」であるが「耐えがたい」と感じられていたようです。カーストの地位や身分による限界、インドの家族制度や結婚制度の特質、経済的な不安定さなどに起因するこれらの社会的・心理的な問題に対する解答は、「過酷な現実に耐える」か「耐えがたい現実から自由になる」かの二者択一です。このような状況のなかで、わたしがインタビュしたバウルのおおくは、これらの問題に対する意味ある解決策を、「文化的に是認された世捨て」、すなわち「マドゥコリの生活」に見いだすことができたのです。

マドゥコリの生活は、個人の選択肢が制限されたカースト社会における、選択可能な「もうひとつのライフスタイル」です。マドゥコリの生活は、それがどのような形態であれ、カースト制度が存続するかぎり、個人が生き延びるための「生存戦略」として、これからも選択されるでしょう。またマドゥコリの生

活は、カースト社会のなかで差別されたり排斥された人びとや、カースト社会の社会関係や規範に疑問をもつ人びとの、心理的・社会的な「適応戦略」として、これからも存続するでしょう。

バウルのライフヒストリーは、バウルがベンガル社会の「周縁部」の輪郭のはっきりした集団であることを十分にしめしています。ベンガル社会の大多数の人生を規定するカースト制度に対する彼らの否定は、バウルを社会の支配的な部分の外側に、そして対立するものとして位置づけます。それにもかかわらず、バウルは社会的に認知された周縁的集団の構成員として、ベンガル社会と親密に共存しています。このように、ベンガル社会の「世俗の人びと」と「バウル」とのあいだには、社会的・文化的な緊張と均衡が日常的に存在します。そして、バウルという周縁的人間の存在そのものが、ベンガル社会の「中心部」を崩壊から守っているかのようです。なぜなら、「バウルの道」はカースト制度がいまだに根強いベンガル社会において、社会を拒否した人に、あるいは社会に拒否された人に、「もうひとつのライフスタイル」を提供しているからです。それはあたかも、必然的に矛盾をふくまざるをえない複合社会が周縁的人間を生みだし、その周縁的人間の存在そのものが社会全体を完全な分裂から守っているかのようです。しかしバウルにとっては、カースト制度の維持にはたす彼らの役割は、まったく理解の範囲をこえたものでしょう。

四、四住期の制度

さて、世俗の人びととパウルの関係を考察するために、ヒンドゥー教徒の人生に対するかんがえ方を検討しましょう。

古代インドでは、「ダルマ」（社会的規範）を遵守すること、「アルタ」（実利）を追求すること、「カーマ」（愛、とりわけ男女間の性愛）を交歓することが人生の三大目的とされ、この三つを充足しつつ家庭をいとなみ、子孫をのこすのがひとつの理想とされました。このかんがえ方はその後も生きつづけ、現代においても、世俗のヒンドゥー教徒にとって理想的な生き方とされています。

またいつぼうでは、とくに業・輪廻の思想が明示されたウパニシャッド思想以降、世俗の世界を放棄し、こつじぎゆぎょう乞食遊行しつつ苦行や瞑想よって輪廻から解放されること、すなわち「モークシヤ」（解脱）を達成することが宗教的理想として立てられました。

相反する実践を要請するこのふたつの理想を、実践の時期を区分することによって調和させ、合理的に設定されたのが、「四住期（アーシユラマ）」の制度です。四住期とは、バラモン教徒が生涯に経過すべきものとして、古代インドの『マヌ法典』が規定する四つの段階のことです。これによると、バラモン教徒、すなわちシユードラをのぞく上位の三ヴァルナは、（1）師のもとでヴェーダ聖典を誦し、祭式の

実施法をまなぶなどの宗教的教育をうける「学生期」、(2) 結婚して男子をもうけるとともに、家庭内の祭式を主宰する「家住期」、(3) 息子に家を託して森林に隠棲する「林住期」、(4) 諸国を遍歴し、たく鉢のみによつて生活する「遊行期」の四段階を順次に経るものとされ、ヒンドゥー社会における理想的なあり方とされました。ただ、この制度が実際にどこまで忠実に履行されたかは疑わしく、現在では、特殊なバラモンを除き、家住期だけが実践されています。しかし、古代から現代にいたるインド人の大多数の生き方を方向づけているゾルレン(当為)としての生き方、人間の理想として「まさになすべきこと」、「まさにあるべきこと」、それが四住期というかんがえ方のなかに反映しているのです。

五、ドルソン現象

世俗の人びととバウルの関係をさらに考察するために、インドの聖地ではどこでも観察される「ドルソン現象」についても、ふれておかねばならないでしょう。ドルソン現象とは、ヒンドゥー教の出家修行者「サードゥー」に対する、世俗の人びとの態度の根拠となつている信仰形態です。「ドルソン」という語は、「見ること」あるいは「知らせること」という意味です。ベンガル語の日常的な会話の文脈では、「ドルソンを得る」とは「ちらりと見ること」であり、「ドルソンを与える」とは「ちらつと姿を見せること」

です。世俗の人びとにとっては、聖地を巡礼するサードゥーをちらっと見ることは、聖地の寺院に祀られた神像をちらっと見ることに相応するとされています。そして世俗の人びとは、敬けんなヒンドゥー教徒が神像を取り扱うのとおなじやり方で、サードゥーに丁寧に接しなければなりません。

このドルソン現象は、「神は人類を救済するために、動物や人間の姿をとって地上に現れる」という、ヒンドゥー教の「化身（アヴァターラ）の思想」と関係があるでしょう。ヴィシュヌ神の十の化身のひとつがクリシュナです。そしてベンガルでは、十六世紀の熱狂的な宗教運動の指導者チョイトンノは、クリシュナと恋人ラーダーの化身だと信じられています。さらに、そのチョイトンノの化身とみなされている「本物のサードゥー」が、現代でもベンガルのあちこちに存在するのです。サードゥーの衣装を着た人が「本物」か「にせもの」かは、シヴァ神だけが知っているとされます。そしてサードゥーたちが、しばしば彼らの同僚のことを「サギ師」や「ペテン師」だと言って、たがいに相手を「にせもの」と非難しあっているにもかかわらず、世俗のヒンドゥー教徒のサードゥーに対する態度は変化していません。世俗の人びとにとって、サードゥーの衣装を着た人は、すべて「本物」のサードゥーなのです。そして世俗の人びとは、サードゥーに食べ物や金品を与えて世話をしなければなりません。それは、「ドルソンを得た」ことに対する返礼です。しかしサードゥー自身は、「ドルソンを与える」ほかには、俗人に対してなんの義務もないのです。

バウルは、サードウーのようなゲルア色の衣装を着て、門口でバウルの歌をうたったり、神の御名を唱えたりして、「ドルソンを与えている」のです。世俗の人びとは、「ドルソンを得た」返礼として、一握りの米や季節の野菜をバウルに施与し、バウルの生存を保証しているのです。

「バウルの道」(バウル・ポト)は、「サードウー」(ヒンドウー教の出家修行者)や「ヨーギー」(ヨーガ行者)、「ボイラギ」(ヴィシユヌ派の出家者)、「ファッキール」(イスラム神秘主義者の行者)など、インド社会に存在するいくつかの「世捨ての道」(シヨナーシ・ポト)のひとつです。インド文明には、カースト制度にもなつて、それと矛盾する世捨ての制度が、文明の装置として組み込まれているのです。

現代においても、カースト社会に生きる世俗の人びとにとって、世捨て人は相反する生活様式を採用した人びとですが、「究極の理想を追求する人」として存在しているのです。そして世俗の人びとは、世捨て人に食べ物や金などを施与し、世捨て人の生存を保証しているのです。それは、世俗の人びとにとっての「スヴァ・ダルマ」(本分)とされているのです。

西行や松尾芭蕉、菅江真澄をもちだすまでもなく、日本人にも出家願望や漂泊の旅への憧れといった意識は存在します。インドと日本のあいだには、そのような共通した意識が、たしかに存在します。しかし、ふたつの点で決定的な相違も存在するようです。ひとつは、インドでは「四住期」という観念が普遍

化し、いわば実践倫理として定着していることです。もうひとつは、理想を本当に実現しようとする人の数が、日本に比べればはるかに多いことです。ちなみに、現代においても、全インドには約五百万人のサードゥーがいるとされます。

六、プロの音楽家の出現

詩人タゴール (Rabindranath Tagore 1861-1941) が、二十世紀初頭にバウルの歌の豊潤さを世に紹介して以来、それまで「奇妙な集団の風変わりな歌」と思われていたバウルの歌と音楽が、再評価されるようになりました。タゴールの影響により、その後ベンガル人学者によつて膨大な数のバウルの歌が採集され、なかには注釈つきのりっぱな歌集として出版されるようになりました。

一九五一年、タゴールが創設したヴィシユヴァ・バラティ大学は、国立大学となりました。大学はそれ以後、「ポーシユ月(十二月中旬)〜一月中旬)の祭典」(ポーシユ・メラ)や「マーグ月(一月中旬)〜二月中旬)の祭典」(マーグ・メラ)を主催するようになりました。大学は、祭典のプログラムのひとつとして、バウルの歌の音楽会を開催するようになったのです。

このようなヴィシユヴァ・バラティ大学の積極的な後援をきっかけに、一九五〇年代後半には、バウ

ルの歌と音楽は、「ベンガル民俗文化の不可欠の部分」と認識されるようになりました。しかしこのことは、ベンガルのバウルの「宗教的求道者」という側面よりも、「民俗音楽家」という側面を強調することになりました。音楽的技量に卓越したバウルは、ベンガルの上流階級の邸宅での私的な音楽会に招聘されたり、大都会での祭典やラジオ・テレビにも出演するようになったのです。

ベンガル社会の急激な変化に呼応するように、音楽的技量に自信をもつ一部のバウルは、マドゥコリの生活をやめ、プロの音楽家としての道をあゆみはじめました。彼らは音楽チームを組織し、バウルの歌や音楽会でしか演奏しなくなりました。また、音楽教室を開設し、アマチュアの音楽愛好家にバウルの歌や音楽を教えるようになりました。彼らは、契約による出演料や授業料によって生活費を稼ぐようになったのです。

レコードやカセットテープに録音を依頼されたバウルは、バウルの歌や音楽の商業的価値を知りました。また、海外公演に招請されたバウルは、外国人の心をもひきつけるバウルの歌や音楽の魅力に気づきました。さらに、野心のあるバウルは、プロの音楽家として活動の機会のおいコルカタに移住したのです。

ほとんどのバウルは、今日でもベンガルの田舎の村々をまわり、門口でバウルの歌をうたったり、あるいは神の御名を唱えたりしながら、一軒一軒マドゥコリをして生活しています。しかし彼らは、コルカタ

に移住し、自宅には電気や水道はもちろんのこと、冷房装置や温水装置も完備し、テレビや電話、運転手つきの自家用車まで所有するプールノ・チャンドロ・ダシユのような、プロの音楽家として成功した「スター」の生活も知っています。今日の若いバウルが、バウルの歌を一握りの米と交換するために「門口」でうたうよりも、気前のよい祝儀が期待できる「舞台」でうたいたがるとしても、それは当然です。そして、彼らの関心が、宗教や儀礼に精通したバウルになることよりも、歌手として人気のあるバウルになることだとしても、それは不思議なことではありません。

七、現代インド文明のメッセージ

ふたりの日本人女性が、バウルの歌と音楽に魅せられて、日本での職を辞し、バウルのグルに弟子入りをして、バウリニ（バウルの女性形）になりました。ひとりには、西ベンガル州バルドマン県に住むかずみ・まきさん（以下、KMさん）です。もうひとりには、西ベンガル州バンクーラ県に住むホリ・ダシさん（以下、HDさん）です。二〇一一年一月現在のふたりのインド滞在年数は、KMさんが一九年、HDさんが八年です。わたしは、彼女たちがマドゥコリの生活をしているのかどうかは知りません。もつとも、彼女たちはインド人ではないし、ヒンドゥー教徒でもないので、カーストの義務を放棄し、マドゥコリの

生活を採用する必要もありません。

わたしは、HDさんとは面識がないのですが、KMさんとは一九九二年十一月に会ったことがあります。朝日新聞の記事にKMさんのことが紹介されていて、「グルと呼ばれる導師の内弟子となり、導師率いるパウル一行と村々を巡る日々が始まった」と書かれていました。わたしは、さっそく朝日新聞大阪本社に電話をし、KMさんの連絡先を教えてくださいました。当時の日本では個人情報に関する意識も低く、そのようなことが可能だったのです。わたしは、KMさんと会う機会をつくり、話を聞きました。彼女によると、一九九一年秋の国立民族学博物館の特別展「大インド展 ヒンドゥー世界の神と人」で行われたパウルの公演に衝撃をうけたという。そして、その年の一二月に渡印し、弟子入りをはたし、一時帰国中という。いずれは行動をともした導師と兄弟弟子を呼んで「日本で公演するのが夢」だという。その後、KMさんの夢がかない、年に数カ月の日本公演が実現しました。

このことは、べつに驚くことではありません、わたしは、フィールドワーク中に、パウルの歌と音楽に魅せられて、何度もベンガルの地を訪れているヨーロッパ人女性を、何人も見ていたからです。また、そのような外国人女性を広告塔として利用し、海外公演をもくろむパウルも少なからずいたからです。

KMさんは、「演奏活動」という表現をしていたので、最初はワールド・ミュージックとしてのパウルの歌と音楽の演奏家になろうとしていたのかもしれない。しかし、KMさんによると、「現在は演奏活

動を控え、ひっそりとアーシユラム暮しをしている」という。そして、現在は「修行中」であるともいう。彼女は、バウルの歌を通じてバウルの宗教を学び、導師を通じて「バウルの道」の究極の目標を知り、それを追求しようとしているのです。KMさんが意識をしているかどうかは不明ですが、彼女はサードゥーのようなゲルア色の衣装を着てバウルの歌をうたい、インド人聴衆に「ドルソンを与えている」のです。そしてインド人聴衆は、彼女の姿を「ちらつと見て」、確実に「ドルソンを得ている」のです。

二〇〇八年、バウルの歌と音楽はユネスコの「人類の無形文化遺産の代表リスト」に登録されました。これをきっかけに、日本でもワールド・ミュージックとしてのバウルの歌と音楽のファンが急増しているようです。ひよつとすると、KMさんやHDさんのような日本人女性が、今後も出現するかもしれません。なぜなら、「人は、もしバウルの道にしたがうならば、だれでもバウルになれる」からです。

現代インド文明は、「神との合一」という究極の宗教目標と、それにいたる「世捨ての道」を、外国人にも提供しているのです。

今日の私の話は、「芸能・神様ごとから楽しみごとへ」ということでしたが、「芸能・楽しみごとから神様ごとへ」ということもありうるのだと、今気づきました。今日の私の話はこれで……。

あと質問があればどうぞ。

「質疑応答」

質問者一…最後のバウルが世に言われたしたのを、私なりに受け止めたならヒッピー族のような感じがしたんですけれども、どうでしょう。

村瀬…ちよつと違いますね。

質問者一…違いますか。どのようなイメージですか。歌を歌ったり、その、社会に寄生したりするような……。

村瀬…ベンガルのバウルとは、「みずからバウルと名乗り、バウルの衣装を身にまとい、人家の門口でバウルの歌をうたったり、神の御名を唱えたりして、米やお金をもらって歩く人たち」のことです。バウルは、世捨て人のようなゲルア色（黄土色）の衣装を着て、「門づけ」や「たく鉢」をして生活費を稼いでいるのです。

バウルの歌は、バウルの宗教を表現しています。しかしバウルの宗教には秘密のことがらがおおいので、その秘密をうたいこんだバウルの歌には、しばしば「なぞめいた用語」が使用されています。つまりバウルの歌には、表面上の意味の奥ふかく隠された「真の意味」を表現するために、暗号のような語句や表現が意図的に使用されているのです。このためバウルの歌は部外者にとっては難解で、いくつもの解釈が可能だったり、あるいは意味不明のことがおおいのです。その反面、部内者には「なぞ解き」

をするようなおもしろさがあるといわれます。

ときどき夕方などに、グルのアーシラムに弟子たちがあつまってくることがあります。そこでもサドナについて議論されることがありますが、それは主としてパウルの歌の解釈を通じてです。彼らはパウルの歌をうたい、パウルの歌の「なぜ解き」を楽しんでいるのです。しかし、歌の「真の意味」は秘密とされ、議論はグルと弟子たちのあいだにかぎられます。

質問者二…先生がイリノイ大学の大学院の時に、ベンガルに初めて行かれたそうですけど、なぜそのパウルについて研究しようと思われた動機は何でしょうか。

村瀬…私が経済学部の学生だった頃は、インドには全然興味がありませんでした。むしろ、スペインやポルトガルに憧れていました。四回生の時に、たまたま聴講した文学部の授業で米山俊直先生と出会い、文化人類学の面白さを知りました。そして経済学部卒業後、文学部に学士入学し米山先生のゼミに参加しました。ゼミで一緒になった友人がインドのことばかり言うのです。なんであいつが、インド、インドというのかと不思議に思って、それでインドだけでなくアジアのことを勉強したのです。文学部卒業後、大学院に進学したと思ったのですが、当時の日本には文化人類学専攻の大学院はなく、一〇年ほど働きました。

イリノイ大学の大学院に進学したのは一九七九年です。専攻は文化人類学で、フィールドワークはイ

ンドで行うことを前提に勉強しました。その間、ノーベル文学賞を受賞した詩人のタゴールがバウルの歌を世に紹介し、それまで「奇妙な集団の風変わりな歌」と思われていたバウルの歌が再評価されたこと、プールノ・チャンドラ・ダシュというバウルがボブ・ディランとアメリカ公演をして大成をしたことなどを知りました。インドにもぜひぶん旅行しました。そして、学位論文のテーマは「ベンガルのバウルの文化人類学的研究」と決まったのです。八三年の春学期にコースワークが終了し、その年の夏に予備調査の資金として往復の飛行機代と三千ドルをイリノイ大学大学院からいただきました。約三か月間、バスや列車を乗り継いで西ベンガル州のほぼ全域を歩いたのです。

質問者三…バウルはベンガル地方とお聞きしたのですが、インドでベンガル以外の地方に広がるとか、その可能性とか、それからバウルの人数はどれぐらいいるのか。

村瀬…人数はわかりませんね。

質問者三…何万の単位か。

村瀬…いやいや、そんなにいないです。私が顔と名前がわかるバウルは二百人程度、バウル全体で一千人ぐらいでしょうね。

質問者三…そんなに、そのインドだけで。

村瀬…インドというかベンガルです。

質問者三…ベンガル。

村瀬…彼らはベンガル語しか話せません。

質問者三…ということは、ベンガルから発展性はないですね。

村瀬…そうですね。でもバングラデシュにもいます。

質問者三…バングラデシュ。

村瀬…バングラデシュは、一九七一年にパキスタンから独立しました。バングラデシュというのは、「ベンガルの国」という意味です。今はふたつの国に分かれています。ベンガル地方というのはもともとひとつで、ベンガル語を話すベンガル人が住んでいる地域のことです。一九四七年にインドとパキスタンが分離独立したときに、西ベンガルにはヒンドゥー教徒が比較的多かったのでインド領に属するようになり、東ベンガルにはイスラム教徒が比較的に多かったのでパキスタン領に属するようになったのです。

質問者三…そういう哲学的な思想と音楽とが全く切り離されて、音楽だけが世界に流布したという…。

村瀬…はい、そうです。独り歩きしている。

質問者三…そうですね。その音楽を奏でてPRをして一緒にイメージするところは、私はヒッピーやと思うのですが

村瀬…バウルの歌はベンガル人でもなかなか難しいと言いましたが、それが聴衆だけでなく若いバウルがバウルの歌のことをわかっていない。つまり適切な宗教的トレーニングを受けていない。だから、昔とどうか、年配のバウルは歌を一曲習おうと思えば、グルのアーシユラムに何日も泊まりこまなければならなかった。でも、今の若いバウルはテープレコーダーで簡単に歌を習える。テープレコーダーは歌や音楽を習うには便利な機械だけれども、バウルの歌の「真の意味」を学ぶことは出来ない。「真の意味」は、宗教的トレーニングを通じて、グルから弟子へと口頭で伝承される事柄です。テープレコーダーは、グルの重要性を忘れさせる「危険な罠」だと思っています。

司会…今の話だとだと、今の若いバウルは歌の「真の意味」も理解せずというお話だったですけど、破門とかそういうのも…。

村瀬…いや昔からバウルの歌の真の意味を理解せず、「九官鳥」みたいに歌うバウルはかなりいたようです。バウルの歌の真の意味は「秘伝」なのです。グルから弟子へと、秘密裏にこっそりと教えられる。グルに入門していないバウルは昔にもかなりいたようです。でも、バウルの格好をして、門付けや托鉢をしていけば、何とか生きていける。マドウコリの生活は、選択肢が制限されたカースト社会における「もうひとつのライフスタイル」として機能しているのです。

バウルのライフスタイルを聞いていく過程で、彼らの出身カーストや学校教育年数なども質問するの

ですが、なんとバラモン階級出身者や大卒者のバウルがいるのですね。

その大卒バウルですが、卒業後に中学校の教師の職に就くのですが、教師としてうまくやって行けず二年で退職しました。やはり教師をしていた兄の紹介で、別の中学校に再就職するのですが、そこでもうまくやって行けず、やはり二年で退職しました。彼は教師としての自分の資質に悩み、解決を求めてコルカタのラーマクリシュナ・ミッションに講話を聴きに行ったり、ヴィヴェーカーナンダの著作などを読みふけったりしていました。二十代後半になったころ、彼は友人とふたりでオリッザ州の聖地プリーへ、徒歩で巡礼に行きました。彼らはメディニプール県のある村の河原で自炊をしていました。彼らのことを不審に思った村人は、その村でアーシユラムをもっていた老バウルに「河原に変な若者がいます。どうしましょう」と相談しました。老バウルは村人に「一度ここに連れてこい」と助言しました。村人は彼らを老バウルのアーシユラムに案内しました。彼は大卒で、ヴィヴェーカーナンダの著作を読むぐらいですから相当のインテリです。しかし彼は、無学のバウルが真理を語るのを聞いてしまった。そして、「真理を前にして、知識は無力である」と悟ったのです。彼は友人と別れ、その老バウルに弟子入りしてしまつたのです。インドには、そういう人がちよこちよこいるのですね。

もうひとつの経験をお話ししましょう。バウルではないのですが、聖地ベナレスで、ヒンドゥー教の出家修行者サードゥーに出合つたときの話です。ガンジス河のほとりの聖地ベナレスで、沐浴をした

り、ガンジス川を眺めたりしながら、何日か過ごしたことがあります。やはり沐浴をしたり、ガンジス河を眺めたりしながら過ごしているサードゥーがいました。彼はいつも私からすこし離れたところにいました。「あれ、あのサードゥー、今日も来ている」と思いながら何日目かのことです。そのサードゥーと目が合いました。彼も私と同じようなことを思っていたのでしょうか。彼は私のところに来ました。そして聞いたことがないような英語ですけど、私はサードゥーに英語で話しかけられたのです。私はびっくりして、なぜサードゥーになったのかと尋ねました。彼はあまりしゃべりませんが、それでも二十年ほど前に家族も財産もすべて捨てて放浪の生活をしているという。それ以前は何をしていたのかと尋ねると、石油会社を経営していたが、思うところがあって、すべて捨てたという。

さきほども言いましたけれど、現在においても全インドで五〇〇万人のサードゥーが存在するそうです。インド文明には、カースト制度にもなつて、それと矛盾する世捨ての制度が文明の装置として組み込まれているのだと実感してしまいます。(拍手)